

平成 28 年度一橋大学附属図書館特別展示

「学者の肖像 学者の風景 : 福田徳三・中山伊知郎展」

会期： 平成 28 年 5 月 12 日（木）～5 月 18 日（水）のうち、平日正午から午後 5 時

場所： 一橋大学附属図書館 図書館展示室

- 肖像画

荒井陸男 《福田徳三》

1931（昭和 6）年

画布・油彩 90.8 × 72.7 cm

1930（昭和 5）年に 57 歳で死去した福田徳三を偲び、荒井陸男に肖像画の制作が依頼された。1929（昭和 4）年に撮影された写真に基づいて描かれた顔つきは、眼光鋭く、二重のまぶた、両頬のくぼみ、眉間や額の薄いしわは生前のおもかげを残している。眉の上、額の中央、レンズの縁には白いハイライトがほどこされ、厚めに塗られた絵具によって立体的な効果が生まれている。また、背景の濃淡の違いによって、後光が差しているようにも見える。シャツの襟は燕尾服などに用いるウィングカラーと呼ばれるもので、左の下襟にはフランスのレジオン・ドヌール勲章の赤い略綬が添えられ、腹部には懐中時計のための金色のチェーンが付いている。

荒井陸男《福田徳三》画布・油彩  
1931 年

荒井陸男はイギリスやフランスに長く滞在し、西洋絵画の研究成果がここに反映されている。福田徳三とは挨拶を一度交わした程度で面識はなかったが、東京商科大学の小此木為二教授と幼馴染みで、その縁もあって依頼があったと考えられる。1926（大正 15）年に竣工した明治神宮外苑の聖徳記念絵画館には《日露役旅順開城》が奉納されており、画家の名前は知られていた。

完成作を福田徳三の家族に見せたところ、「何だか怒つてゐる様ですネ」† と言われ、より柔和な印象に仕上げたと画家は語っている。また、細面で痩身な体躯で描かれているのは、晩年の健康状態が優れなかったことを念頭に置いていたらしい。白黒写真と異なり、油彩の肖像画は生前の細かい表情や肌の色合いを今に伝えている。

† 荒井陸男画伯談「思出す“Imperial”」福田博士の後姿を語る（記念品贈呈式に於ける追想談）  
『如水会会報』第 101 号（1932 年 4 月）p. 115.

- 肖像画《福田徳三》のモデル

福田徳三 1874（明治 7）年－1930（昭和 5）年

1874（明治 7）年、東京神田に生まれる。一橋大学の前身である高等商業学校に進学し、本科 3 年のときには、成績優秀者として北関東・長野・北陸計 7 県の商工業を視察し、修学旅行報告書を提出する。1896（明治 29）年に高等商業学校の講師となり、翌年にドイツに留学した。ミュンヘン大学で、終生の

師ブレンターノ (Lujo Brentano, 1844-1931) と出会い、日本経済史に関する学位論文を執筆する。留学中の 1900 (明治 33) 年に高等商業学校の教授に任命され、その翌年、教員 7 名 (石川巖・石川文吾・神田乃武・瀧本美夫・津村秀松・志田鉀太郎・関一) とともに「商科大学設立ノ必要」(ベルリン宣言) を起草した。1905 (明治 38) 年に突如休職を命じられ、その翌年から慶應義塾で教鞭を執り、小泉信三 (1866-1966) らを育てる。1919 (大正 8) 年には、東京高等商業学校教授として母校に戻った。1923 (大正 12) 年には内務省社会局参与に就任し、同年 11 月に関東大震災後の失業調査を実施する。

こうした社会活動への関与、河上肇 (1879-1946) との度重なる論争、吉野作造 (1878-1933) と結成した黎明会など多方面で活動した福田は、大正年間から昭和初期にかけ、わが国で最も知られる知識人のひとりであった。門下生は数多く、上田貞次郎・左右田喜一郎・大塚金之助・井藤半彌・赤松要・中山伊知郎・杉本栄一・高島善哉・山田雄三など錚々たる面々の名が揃う。福田の幅広い関心はそれぞれの弟子に引き継がれ、彼らは経済学の各分野を率いることとなった。



福田徳三『厚生経済研究』(刀江書院、1930年)

1925年7月、ブレンターノ邸にて撮影。

左から福田、福田夫人、ブレンターノ、来客者、ブレンターノの

## ● 肖像画《福田徳三》を描いた画家

### 荒井陸男 1885 (明治 18) 年—1972 (昭和 47) 年

1885 (明治 18) 年に東京府芝区で生まれる。幕臣であった父の郁之助は戊辰戦争の五稜郭の戦いで海軍奉行を務め、明治期には初代の中央気象台長に就任し、浦賀船渠 (後に住友機械工業が合併) の創設にも尽力した人物であった。生地芝西久保の輶絵小学校を経て、麻布中学、日本中学、京都の同志社などで学びながら、幼少期より画業に関心を示し、周囲の反対を押し切って画家を志す。独力による海外渡航を思い立ち、1909 (明治 42) 年からロンドンの美術学校に通い、2年後には同地の新聞雑誌に挿絵を提供し始める。第一次世界大戦では海軍の従軍画家として多くの海洋画を描いた。1921 (大正 10) 年から 1923 (大正 12) 年にかけて家族でフランスに滞在し、帰国後は鎌倉で関東大震災に見舞われる。1924 (大正 13) 年に旅順を訪れ、日露戦争の旅順開城の下絵を描き、1928 (昭和 3) 年に乃木希典とアナトーリー・ステッセルの水師営での会見を描いた《日露役旅順開城》を完成させ、明治神宮外苑の聖徳記念絵画館に奉納する。その後、1940 (昭和 15) 年にオーストラリアに渡り、《軍艦伊吹、濠州ニュージーランド軍艦護衛》を制作した。

第二次世界大戦中に東京の自宅が焼失したため、1951 (昭和 26) 年まで軽井沢の別荘に移り、最高裁判所長官の三淵忠彦といった日本の要人、アメリカ軍将校などの肖像画を描く。1956 (昭和 31) 年に《日中貿易協定・東京調印式の図》を完成させると、中国から国賓として招聘され、絵画を携えて北京に渡る。滞在時に毛沢東主席の肖像画の注文を受けるが、1968 (昭和 43) 年のアトリエの火事で作品は焼失

する。1972（昭和 47）年に東京で死去。特定の団体や組織に属さずに独立不羈の精神を貫き、明治、大正、昭和の時代を生きた画家であった。

- 肖像画  
宮本三郎 《中山伊知郎》  
1962（昭和 37）年  
画布・油彩 72.6 × 60.7 cm

椅子に腰掛けて腕を組んだ姿が、柔らかく伸びやかな筆触で描かれている。くつろいだ様子に見えながら、口元はしっかり結ばれ、厳格な雰囲気漂っている。1962（昭和 37）年に一橋大学を退官する記念に、ゼミの卒業生によって宮本三郎に肖像画が依頼され、世田谷区奥沢のアトリエに 1 週間ほど通って完成された。

グレーの背広とともに、縁なしの眼鏡、胸元の白いポケットチーフ、カフスで袖を留めた白いシャツは洒落な印象をもたらしている。背広の右腕のしわには筆のあとが残り、右手の甲は十分に描き込まれていないが、これらは画面に動きを生み出している。黄土色に粗く塗られた背景は人物を引き立て、椅子の背もたれの赤い布地が画面にアクセントを与えている。

退官記念のあいさつで中山伊知郎は、「非常に良い肖像画、私は大変気に入っている」と述べていた。ただし、絵を見た知人から、「軍鶏（シャモ）が喧嘩しているような非常に鋭い感じが出ている」\* と言われ、中山自身も思った以上にきつい表情に仕上がったことに驚いたという。自身の印象を画家に伝えると、別に用意していた柔和な表情のデッサンをすぐに渡され、その行き届いた仕事ぶりに感服したようである。また、同年の暮れに御礼として伊勢海老を画家に贈ると、扇面に海老を描いた小品が返礼として届いたという逸話も残っている。単なる画家とモデルの関係を超えて、この肖像画は両者の親交を生み出すきっかけをもたらした。

\* 中山伊知郎『わが道経済学』（講談社、1979 年）p. 148.



宮本三郎《中山伊知郎》画布・油彩  
1962 年

- 肖像画《中山伊知郎》のモデル

中山伊知郎 1898（明治 31）年－1980（昭和 55）年

1898（明治 31）年、三重県に生まれる。1920（大正 9）年に一橋大学の前身である東京商科大学に入学し、翌年に福田徳三のゼミナールに所属し指導を受ける。後に中山は、「一橋にきて福田先生の講義を聞かなかったら、おそらく私は経済学者にはなっていなかったに相違ない。」\*\* と語っている。1923（大正 12）年に卒業し、同年、東京商科大学助手に就任する。中山は文部省の命により、1927（昭和 2）年から 1929 年にかけてドイツに留学した。ボン大学にて、すでに理論経済学で確固たる地位を築いていたシュンペーター（Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950）



『一橋大学卒業記念写真帳』  
（1956 年）

に師事する。1929（昭和4）年に東京商科大学助教授、1937（昭和12）年に同教授となる。1949（昭和24）年に東京商科大学長に就任し、同年5月の改組にあたり、初代「一橋大学長」となった。

主著『純粹經濟學』を出版したのは、1933（昭和8）年のことであった。均衡理論に貫かれる経済学体系を示そうと試みた同作は当時大きな反響を巻き起こしたが、本人は「『シュムペーターを超える』などと大言をはきながら、超えるどころか、離れることさえできなかった」\*\*\* と述懐している。

第二次世界大戦後すぐに大蔵大臣渋沢敬三（1896-1963）の要請で戦後財政の処理に参加したことを契機に、以後は政府関係の活動も増えていった。労働省中央労働委員会での活動は15年間にわたり、1950（昭和25）年から10年間は委員長の任を果たす。吉田内閣のブレーンも務めるなど、経済政策の面でも尽力した。

\*\* 中山伊知郎『わが道経済学』（講談社、1979年）p. 12.

\*\*\* 中山伊知郎『中山伊知郎全集』第1集 純粹経済学の拡充（講談社、1972年）p. XI.

## ● 肖像画《中山伊知郎》を描いた画家

### 宮本三郎 1905（明治38）年－1974（昭和49）年

石川県小松市に生まれる。能美郡御幸村日末小学校、小松中学校で学ぶ。画家と軍人のいずれの道に進むべきか迷うなか、陸軍幼年学校の受験に落ちたために中学校を中退し、画家を志して神戸に出る。1922（大正11）年に上京すると川端画学校洋画部に入り、富永勝重、藤島武二に師事。また、安井曾太郎や前田寛治からも教えを受ける。関東大震災後に京都に移り、関西美術院で黒田重太郎の指導を受けた。初期は女性、裸婦、家族の姿を鮮やかな色彩と確かな素描で捉えた作品を発表して注目を集める。1927（昭和2）年に二科展に初入選を果たし、1932（昭和7）年に二科会会友に推挙される。1934（昭和9）年に銀座画廊で初めての個展を開催。1936（昭和11）年に二科会会員に推挙される。

1938（昭和13）年に渡欧し、パリのアカデミー・ランソンに登録する。フランス、イタリア、スイス、イギリスの美術館や遺跡を巡った後、第二次世界大戦の戦火を逃れて1939（昭和14）年に帰国。陸軍省の派遣で戦地に赴き、《山下、パーシバル両司令官会見図》などの戦争画を描き、戦時中から高く評価された。この時期の暗い色調の作品を経て、戦後は一段と艶やかな色彩を用いて、舞妓や花の静物などの新たな主題に取り組み、新聞雑誌の挿絵や表紙絵を数多く手掛けた。また、金沢美術工芸専門学校（現在の金沢美術工芸大学）教授、多摩美術大学教授などを務め、後進の指導にあたった。日本美術家連盟理事長、ユネスコ日本国内委員会委員などの要職を歴任し、1966（昭和41）年に日本芸術院会員となる。1974（昭和49）年に東京で死去。故郷の石川県に小松市立宮本三郎美術館、1935（昭和10）年からアトリエを構えた世田谷区奥沢に世田谷区美術館分館宮本三郎記念美術館がある。

### 【謝辞】

今回の展示にあたり、以下の方々のご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。（敬称略）

岡崎絵画修復工房（《福田徳三》の修復）、有限会社修復研究所21（《中山伊知郎》の修復）、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所（肖像画の調査）、言語社会研究科准教授小泉順也（本展示の助言・肖像画に関わるパネルの執筆）。